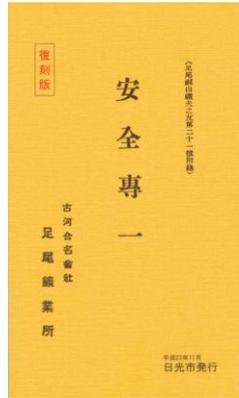


正式名称	栃木県日光市足尾町
アクセス	わたらせ渓谷鐵道「通洞」「足尾」「間藤」
展示内容	<p>1. 足尾における労働安全運動</p> <p>足尾は公害の原点と言われることがある。</p> <p>しかし、足尾は、労働安全運動発祥の地でもある。</p> <p>今、日本中どこの工場、どこの工事現場でも「安全第一」と言う文言を見ないことはない。</p> <p>大正5年（1916年）、前逓信省管理局長の内田嘉吉は北米旅行において行く先々で「Safety First」と言う標語に接しこれを日本に持ち帰った。</p> <p>「Safety First」は当時世界第一の製鋼会社USスチール社から始まったものである。内田はこれを「安全第一」と翻訳し、帰国後の大正6年（1917年）、「安全第一」¹⁾を発行、また、同年「安全第一協会」を設立し、その普及に尽力した。</p> <p>この100年に及ぶ運動開始に先立つ大正元年（1912年）、足尾鉱業所において、同様の概念が「安全専一」と翻訳され、安全運動が展開された。これは後に足尾鉱業所長となった小田川全之がやはり米国旅行で知り持ち帰ったもので、「安全専一」と記載した^{ほうろう}珐瑯引きのプレートを作り、構内各所に掲示したのである。</p> <div data-bbox="673 1140 1118 1404" data-label="Image"> </div> <p>「足尾銅山観光」構内に掲示されている「安全専一」のプレート</p> <p>小田川は大正2年（1913年）10月、このような観点から、月刊社内報「鑛夫乃友」誌上で災害の防止を訴えている。また、大正3年（1914年）米国滞在中の足尾鉱業所小島甚太郎採鉱課長（後、安全第一協会理事）は小田川宛の便りで米国での「Safety First」運動の発展ぶりを伝えているが、これも「鑛夫諸君へ」と言う記事で社内に紹介されている。²⁻⁴⁾</p> <p>そして小田川の発案で大正4年（1915年）1月15日「足尾銅山鑛夫乃友第二十一號附録」として「安全専一」⁵⁾を発行した。</p> <p>「安全専一」は、足尾鉱業所で行われる作業に関してどのように安全を確保していくかが記載されている。以下のような構成である。</p>



はしがき 注意 総体の心得

- 第一 採鉱
- 第二 製煉
- 第三 電気
- 第四 機械
- 第五 土木
- 第六 運搬
- 第七 林業
- 第八 導火製造

以下に「注意」と「総体の心得」の一部を現代語訳し、紹介する。

注意

「安全専一」に心得すべき個條はだいたい仕事別に順序を立てて編纂いたしました。そのうちには重複を避けるために、一方には掲げてあるが、一方には略してあるような事柄もだいぶあります。(略)

そんな訳でありますから、編纂の区別には重きをおかないで、いやしくも自分の仕事に関係のある事柄についての心得は、どれもよく読んで実行して貰わなければなりません。「安全専一」の心得には各自の領分というようなものはありませぬ。いれものは別でも中身は共有と御承知を願います。

総体の心得

一 酒を飲んで仕事場に出てはならぬ

(略)

一 すべての機械は故障のないことを確かめた上で使いなさい

一 大勢同じ場所に集って仕事をするときには相互に気を付けて混雑を避けなければならぬ

(略)

一 自分の取扱うべきでない機械や器具にみだりに触ってはならぬ

一 変事があつたとき又は危険を認めたときには、直に係員に知らせなさい

一 休日の翌日にはとかく疎漏がちで負傷が多いから、ウツカリして過失をせぬようよく気を付けなければならぬ

以上、心得をつばめて言えば、つまり「常に気をたしかに持って、よく万事に心を配る」という事であるから、この一言を忘れてはならぬ。

2. 足尾における自然保護と自然回復

足尾では近隣の山々から多くの木材が燃料として切り出された。植林も行われたが、精錬所からの排ガス（亜硫酸ガス）の影響で根付かず、山の保水力は落ち、大雨の度に鉱毒が渡良瀬川へ流れて行った。「足尾鉱毒事件」である。

昭和 31 年（1956 年）足尾銅山では世界に先駆け、フィンランドのオートクンプ社が開発した「自熔製煉法」⁶⁾を導入した。乾燥した精鉱を予熱した酸素とともに炉に吹き込み、瞬時に溶解し、銅と鉄に分離するものである。この方法での銅の品位は高く、また、排ガス（亜硫酸ガス）は排出されることなく硫酸工場へ導かれる「無公害方式」である。この方法は高く評価され、足尾から世界へと広がっていった。

植林は現在も多くのボランティアが参加して行われている。立松和平（1947-2010 年）はその中心的存在であった





現在の植林の足場（左側）とこれからの植林予定地
ニセアカシアなどが植林されている

<http://www.pref.tochigi.lg.jp/d51/02gyoumunaiyou/06moridukuri3/ashionotisan.html>

足尾に関する
情報収集及び
体験・体感

1. NPO 法人 足尾歴史館 <http://ashiorekishikan.com/>
足尾に関する情報交換を目的に開設された。江戸時代から昭和までの足尾の姿を伝える写真など、貴重な資料が展示されている。また、往時、足尾の町中を走っていた「ガソリンカー」を復活、展示・運転している
2. NPO 法人 足尾に緑を育てる会 <http://www.ashiomidori.com/>
荒廃した山々への植林活動を行っている
3. 足尾環境学習センター
足尾に関する歴史や環境問題が学べる。研修室も完備。2007年からは「足尾に緑を育てる会」が指定管理者となっている。
そばには、宿泊施設（国民宿舎かじか荘）もある
4. 足尾銅山観光 当時の坑内の一部が見学できる
http://www.nikko-jp.org/ashio/sansaku_ashiodozan.shtml



足尾の町中に唯一残る当時の煙突

町中には多くの遺産が残っており、資料館等で情報を収集しながらの町中の見学もお勧め。なお、足尾は「世界遺産登録」を目指している

ここもお勧め

★「安全第一」と「日光二荒山神社」 <http://www.futarasan.jp/>

足尾から国道 122 号線を辿っていくと 1 時間ほどで日光に到着する。

二荒山神社は「日光」の地名の由来になったと言われている（「二荒（にこう）」→「にっこう」）。この二荒山神社は、「安全第一運動の風変わりな共鳴者」として知られている。^{2,3)}

日光二荒神社は、安全第一協会が設立されると、進んで会員となり「安全第一」の宣伝にひと役買った。普通、神社は「火の用心」と書いた火伏せのお札を発行するのだが、二荒神社は、中央部に火災の絵と火災予防に関する注意をかき、四隅に「安全第一」の文字を入れた美濃紙大のポスターをつくって家庭や工場などに配り、掲示するよう勧めた、と言われている。しかしその経緯は現在のところ不明である



★小田川全之が眠る「東京都多磨霊園」

小田川全之は、後年、安全第一協会に参加し、また、足尾鉄道株式会社社長を務め事業の発展にも尽力した。大正 10 年（1921 年）には古河合名会社を離れたが、鉱業の発展に重要な役割を果たした。昭和 8 年（1933 年）6 月 29 日逝去、現在、東京都多磨霊園 2 区 1 種 7 側に眠っている



多磨霊園は、小田川をはじめとする多くの著名人が眠っている。

<http://www6.plala.or.jp/guti/cemetery/>

<p>参考文献。 更に詳しく知りたい方はご覧ください</p>	<p>1) 内田嘉吉「安全第一」丁未出版社 大正6年9月11日 現代語訳が出版されている。 安全第一に学ぶ会「安全活動の源流－内田嘉吉「安全第一」を読む」 大空社 平成25年10月19日</p> <p>2) 中央労働災害防止協会「日本の労働安全運動（五十年の回顧と展望）」 昭和46年5月25日</p> <p>3) 中央労働災害防止協会「安全衛生運動史 安全専一から100年」 平成23年10月6日</p> <p>4) 中央労働災害防止協会「写真と年表で辿る産業安全運動100年の軌跡」 http://www.jisha.or.jp/anzen100th/nenpyou01.html</p> <p>5) 古河合名曾社足尾鑛業所「安全専一」大正4年1月15日 復刻版 平成23年11月 日光市発行 以下で全文を見ることができる。 http://www.nikko-ashio.jp/images/ashio/anzen.pdf</p> <p>6) Petri Bryk et al:Flash Smerting Copper Concentrates Journal of Metals. 1958(6) 395-400</p>
<p>見学記録作成</p>	<p>2013年8月 三谷洋</p>